

科学史技術史通信

特定非営利活動法人
科学史技術史研究所
田中・山崎・飯田・菊池・道家文庫

No.24

2015.3.31

165-0027 東京都中野区野方1丁目29番1-B101

Website URL: <http://ihst.jp/> e-mail: ihst@ihst.jp

「Zürichの3人」から 『スイスと日本の近代化学』へ —執筆の背景と内容紹介—

堤 憲太郎・科学史技術史研究所
/元セントラル硝子(株)

当研究所所員堤憲太郎氏が、『スイスと日本の近代化学』を2014年に出版されました。執筆の背景とともに内容を紹介して頂きました。本原稿は一昨年入稿されたものですが、遅滞をお詫びします(編集委)



2004年7月のある日、出張で名古屋から東京へ向かう新幹線の中で私は原稿を書いていた。

当時、板硝子メーカー(セントラ

ル硝子)の研究所に勤務していた私は、日本セラミックス協会から協会誌“セラミックス”の巻頭言へ寄稿を依頼されていたのである。その原稿には、少し前、出張の時に立ち寄ったチューリッヒのことを書いた。

『昨年9月にイタリア、ベネチアにある国立ガラス研究所 Stazione Sperimentale del Vetroに出張した帰り、ベネチアからミュンヘンに向かう途中にスイス、チューリッヒに立ち寄った。街中の歴史的

に有名なリンデンホフの丘(チューリッヒ発生地)に立って、眼下に流れるリマト河の対岸を見ると、夕方の景色の中、丘の中腹に堂々たる石の建物、スイス連邦工科大(ETH)とZürich大学が並んで見えた。これらの大学は日本の化学の発展に大きな役割を果たしたことを思い、一時の感慨にふけた。

明治39(1906)年東京帝国大学助教授真島利行は政府から留学を命じられ、ドイツ、キール大学のハリエス教授に学んだ後、このスイス連邦工科大学(ETH)に有機化学の研究室を構えるR. ウィルシュテッター教授の門をたたいた。ウィルシュテッターは当時、葉緑素クロロフィルの研究にかかっており、研究室は活気に満ちていた。真島はアニリン酸化の研究などで研究室に貢献した。真島がチューリッヒに滞在している時に、やはり、ウィルシュテッターの名声を慕って東京帝大医科大学薬学科の朝比奈泰彦が研究室に入った。また、Zürich大学にはA. ウェルナー教授がおり、新しい配位説を打ち出して、錯体化学、立体化学を無機化学に持ち込み活発な研究を進めていたが、日本からは柴田雄次がその研究室に加わった。このほぼ時を同じくしてチューリッヒで学んだ3人は、やがて日本の有機化学、薬化学、無機化学の発展の上では欠かせない業績をあげている。・・・』

セラミックス, 39(10), 804(2004). より

以上がその時の原稿の抜粋であるが、原稿には「Zürichの3人」と題名を付け、ほどなくして、2004年“セラミックス”10月号に掲載された。そして、この原稿が、私がチューリッ